

『社会起業と事業計画の実際』 議事録

日時：2005年9月9日 19:00-21:30

場所：名古屋ボランティア・NPOセンター研修室

講師：加部隆史氏（NPO一新塾理事、NPO安全工学研究所理事）

受講：大藪、岡野、近藤、番、百田、松井、宮田（記）／敬称略

<内容>

1. 9.11 選挙の争点

- ・ よく分からないマニフェスト…というのも各党には明確な現状とビジョンを示した戦略が無い。そのため党首討論でも議論になっておらず、国民にとっても訳が分からない。
- ・ ポスト福祉国家…財政の肥大化をどうするか。
- ・ 25年遅れの改革…日本は高度経済成長に浮かれ、今になって25年前にサッチャーやレーガンが行った改革を遂行しようとしている。
- ・ 行政はリスク管理…税の受益と負担の妥当性とマニフェストの妥当性をリスクアセスメントの手法から評価する事が可能。

2. 大部分の起業は失敗する

- ・ 「いままでこうだった」は通用しない…人口、競争、環境など変化が激しく、過去を捨て、失敗を克服するイノベーションの鉄則が求められる。
- ・ 帝王学は学ぶのではなく盗む…伝授はできない。がんばりができる人が少ない。2代目、3代目が会社を潰す。

3. 社会起業は志・使命感

- ・ 志無いものは短命…情熱が伝わらない。特に社会事業は使命感。日本では、多くの役割が食っていくためのものになっているので、志なくば人は動かない
- ・ 恒常的な差別化が無いものは廃れる…日本はモノマネとコストダウンにもっていかれる。
- ・ 人と協働できない人は潰れる…失敗するのは当たり前だが、問題を抱え込まず、人間としての対人関係を構築する。当たりの事が大切。

4. 3つの箱

- ・ 3つの箱とは「現状」「これから」「ゴール」
- ・ 現状…客観性を持たせるために人の数倍勉強が必要。日本だけでなくグローバルな視点、専門家との接触し、問題点を整理する。
- ・ これから…方向性を示し、検証を重ねる。ある意味うまく行かない事が当然なので、リスク分散のためのモジュール展開（包括的なアプローチ）と柔軟な軌道修正が必要。その過程で賛同を得、組織を構築する。
- ・ ゴール…全体として目指す方向。

5. 計画に関して

- ・ BS、PL、CFと行動計画…専門家との協働が必要
- ・ 利益をあげている企業はいずれにしろ法人税を持っていかれるので、その一部を社会事業に引き込むことも検討できる。
- ・ 行動計画…年間、四半期、月間、毎週計画をたてる。ただこれだけでやった気になってしまうので、実態を伴っているかの検証が必要。

6. 実行の障害

- ・ 自分自身…努力不足、知識不足、対人関係（人間的未熟さ、オープンでない、問題発生時の対応）、困難に立ち向かえない、どれだけ真剣に立ち向かえるか。

- ・ 仲間同士…約束を守る、状況判断、細かい事から関わってくる
- ・ 説得し、相手を押し込めるのではなく、賛同し協力を得る。売り込むのではなく、依頼される状況をつくる。この循環が、仕事の増大を呼ぶ。

7. NPO 安全工学研究所

- ・ 安全…安全、人権という誰も反対しないテーマでかつ国際的な動向をふまえており、専門家も関わっているため誰も反対しない。
- ・ 1枚の紙…数時間は説明できるくらいの要素が詰まった1枚の紙の重要性。皆忙しいので、1枚の紙にまとめた方が理解される。

8. ミッションは得られるか、どれだけ協力者を得られるか

- ・ 公私の区別
- ・ 組織人間から創業者へ
- ・ 史上最強打線を誇るジャイアンツはなぜ弱い（組織、チーム）
- ・ 後ろではなく、前を見続けられるか？
- ・ 常に勉強を続けられるか
- ・ 3年やって埒あかなければやめる勇気
- ・ 社会起業のみでの生活は困難…自分の食い扶持を確保してから他人に奉仕。
- ・ グローバルを目指し、世界に挑戦…良き例が、野茂、松井、イチロー、中田、高原、愛ちゃん。

9. 結果が全て

- ・ 議論していても駄目で、行動と結果が全て。カルロスゴーンの事例。ダーウィンの種の起原ではないが、現存しているものは結果的に生き残ったものである。
- ・ ただし、一方で過去の成功体験は固執を生み恐ろしい。

10. キーワード

- ・ GLOBAL→知見
- ・ SPEED→訓練
- ・ INNOVATION→行動